心理学研究科

	年次	定員	志願者		受験者		合格者	入学者	
学生の確保（人）			学内	学外	学内	学外		学内	学外
	1年次	— ※ （—）	— ※ （—）	— ※ （—）	— ※ （—）	— ※ （—）	— ※ （—）	— ※ （—）	— ※ （—）
			学内	学外	学内	学外		学内	学外
	3年次編入学	— ※ （—）	— ※ （ 0）	— ※ （ 2）	— ※ （ 0）	— ※ （ 2）	— ※ （ 2）	— ※ （—）	— ※ （ 2）

	博士課程修了		論文博士	博士課程修士
学位授与数（人）	修了年次定員	修了者数	授与数	授与数
	8（ 8）	4（ 5）	—（ 2）	1（14）

	論文・著書発表数	学会発表数	受賞・表彰等
学生の研究活動（件）	45（55）	67（70）	2（ 2）

		教員	企業	公務員	研究員（学術振興会）	その他
学生の進路（人）	修了者	— （ 3）	— （—）	— （—）	4 （ 1）	— （ 1）
	退学者	2 （ 2）	1 （—）	2 （ 1）	— （—）	— （ 2）

・「学位授与数」の欄の「博士課程修士」は，中間評価の合格者数を示す。
・（ ）は前年度の数値を，※は外国人留学生を内数で示す。

1　心理学研究科の活動

本年度の新研究科３専攻（心理学専攻，ヒューマン・ケア専攻，感性認知脳科学専攻）の心理学関係分野において，入学者は14名（学内６名，学外８名）であった。今年度は志願者数が例年に比較すると低下した。優秀な学生確保のためにも今後志願者の動向に注意する必要があろう。博士課程修了者数は今年も定員の５割を維持できた。学位取得に向けた正・副指導教官の指導効果が認められたといえる。学生の論文等の発表数は例年とほぼ同程度であったが，新旧の博士課程の移行時期にあたるため，さらに一層の論文等の発表数を増加させるよう，課程修了に向けた指導強化を行いたい。研究科の再編に伴い，新３専攻の心理学関係分野での定員が増加したため，教室不足が顕著になった。また，次第に新たな教育研究指導体制の確立がなされつつあるが，なお詳細な検討が必要である。発達臨床の分野では，「心理相談室」と「子ども相談室」が設置されており，院生の技能修得の場とともに社会的貢献の場となっている。

2　教員の教育業績評価の状況

学生の学位取得に向けて，３回の中間論文指導会，博士論文の構想発表会，予備審査会を例年行ってきている。特に教員の教育業績評価の目安としては，各教員の指導学生数，指導学生の学会発表数・掲載論文数，指導学生の中間論文合格者数・課程修了者数，大学・研究機関への就職者数等がある。このような評価指標は，教員の資質以外に，社会の時流に影響される専門分野間の入学者数の相違にも大きく影響を受けるので，公平な教育業績のために他の評価指標の導入が課題となっている。

3　自己評価と課題

(1) 自己評価

中間論文の中心は新研究科に移行したため，本研究科の中間論文合格者は１名であった。毎年全学生に学術振興会特別研究員への申請を奨励しているものの，今年度は残念ながら採択数はＤＣ１名のみであった。修了者と退学者はそれぞれ４名と５名の計11名であった。退学者の大部分が大学教員・研究員として就職したが，一方で修了者は主に新規に創設された博士特別研究員となった。このように学位取得と同時の就職は必ずしも順調とは言えず，年々厳しさを増している。

(2) 課題

学位取得率の増加が最大の課題である。今年度も定員の５割を確保できたが，オーバードクターも多いため，正・副指導教官の密接な連携の下での一層の指導強化が望まれる。ほとんどの学生が大学や研究所への就職を希望しているが，現状は厳しさを増しているので，中間論文段階を学生の研究者としての適性評価の機会とみなし，これに応じた指導の仕組みを考えなければならない。研究科の再編に伴い心理学関係分野の新３専攻の定員数が増加したため，心理学の研究室不足が深刻化している。新研究科への移行時期でもあるので，学位取得に向けて研究環境を整えることが急務である。助手・技官数の減少もあり，研究や事務に対する支援体制の整備が必要である。

4　その他特記事項

Tsukuba International Conference on Memory（第４回）を平成15年１月11—13日に開催した。